

二〇一八年一月二六日

湧水の噴く辺に群るる寒の鯉  
雪合戦団地に子らの声ひびく  
ゴルフ場広く見えたり雪の原  
庭の雪搔くとりあえず道路まで  
雪高く積むは北国トラック便  
日溜りに消ゆ風花の命かな

やよい  
智恵子  
治男  
こすもす  
やよい  
せいじ

二〇一八年一月二五日

新築の太梁軋む寒さかな  
遊ぶごとと畝間氷を割る鴉  
糲殻に埋むは農の寒玉子  
せせらぎを辿り近道初観音  
大寒波ポタリともせぬ蛇口かな  
木枯しや夜半の雨戸を叩きづめ

やよい  
明日香  
うつき  
よし女  
よう子  
やよい

二〇一八年一月二四日

大寒の靴音の急くオフィス街  
見覚えのありし癖字の年賀状  
飲み干せし葉包かさね春を待つ  
奥宮の神鈴鳴らす寒九かな  
降り積もる雪に家路の遠きかな  
廃校のグラウンド駆けて虎落笛  
庭景色風の形に雪積もる  
氏神の御神酒に酔ひし若い衆  
引越しの置土産なる雪だるま

菜々  
そうけい  
更紗  
ぼんこ  
智恵子  
うつき  
よし女  
そうけい  
せいじ

二〇一八年一月二三日

ペランダの手摺に小さき雪だるま  
波照間の黒糖ふふみ寒に耐ふ  
満開の蠟梅に気を貰ひけり

せいじ  
うつき  
あさこ

まほろばの色の失せたる枯野かな

明日香

水仙や沖の小舟の見ゆる岬  
軒下の洗濯物へ風花す  
離乳食もりもり食ぶ子春隣  
とろろ汁母郷恋しとすすりけり  
綻びし丹前なれどお気に入り

あさこ  
なつき  
菜々  
よう子

二〇一八年一月二二日

着膨れて旗振る路地のガードマン  
狼藉のごとき轍や雪の道  
竹林に洩るる笹鳴き露天の湯  
無人駅守るがごとく雪だるま

三刀  
こすもす  
やよい  
智恵子

二〇一八年一月二一日

風の道なれば裏庭大根干す  
父祖の地の何年ぶりや梅探る  
ビルあひの宮のひだまり梅蕾む  
ジヨギングの人らも笑顔寒日和  
末の子の進路も決まり春隣  
薄目閉づ十六羅漢山眠る  
日脚伸ぶだけ長くなる畑仕事  
雪道を登る草鞋の僧侶かな

三刀  
うつき  
菜々  
満天  
はく子  
なつき  
明日香  
智恵子

二〇一八年一月二〇日

藁苞の傾ぎしままに寒牡丹  
尾も鱗も微動だにせぬ寒の鯉  
瓔珞の一粒ならめ竜の玉  
目鼻なき野仏深く雪被く  
四方の門開けて千年梅の宮

さつき  
たか子  
うつき  
宏虎  
菜々

毎日句会みのる選・二〇一八年一月二八日